

ナサニエル・ホーソン研究

—ピュリタニズムとロマン主義—

棚 瀬 江 里 哉

A Study of Nathaniel Hawthorne

—Puritanism and Romanticism—

ERIYA TANASE

Abstract

This paper aims to see how Puritanism and Romanticism, two ideas closely related to Nathaniel Hawthorne, are treated in his works, clarify his views toward them, and examine the religious ideas of the man himself. In spite of his criticism of the Puritans, Hawthorne feels that they are more in the right compared with the Romantics, in that they recognize the power of evil and sin. However, he did not agree with the Puritan doctrine in some points and cannot be called a Puritan.

1. イントロダクション

ナサニエル・ホーソンの名とピュリタニズムを結びつけて論じることにはしばしば行われてきた。これは次の二つの事を考えれば、まことにもっともなことと言えよう。まず第一に彼の作品の多くが、17世紀米国ニューイングランドのピュリタン時代を背景として描かれていること。彼の最高傑作である『緋文字』をはじめとして、短編「優しい少年」、「メリー・マウントの五月柱」、「白髪の戦士」などがあげられる。第二の理由は、ホーソン自身がニューイングランドのピュリタン、それも歴史に名を残している著名なピュリタンの子孫だったことである。

ホーソンの祖先が生きていたのがピュリタニズムの時代だったのに対して、彼自身は19世紀

なかばのアメリカロマン主義の時代に暮らしていた。アメリカロマン主義はラルフ・ワルドー・エマソン、及びその影響を受けた超絶主義者たちによって代表される。エマソンの考えはユニテリアン神学から発展したものであった。超絶主義とユニテリアリズムはともにニューイングランドで栄えた思想運動であり、ニューイングランド人であったホーソンはこれらのロマン主義者たち¹⁾の考えに必ずしも賛成していたわけではないのだが、同時代に生きたものとして何らかの影響を受けないではいられなかっただろう。

ピュリタニズムとロマン主義—この二つの思想とホーソンとの関係は多くの批評家たちの議論を呼んできた。ここでは二つの例をあげれば足りるであろう。『アメリカン・ノートブッ

クス』を編集し、またすぐれたホーソンの伝記を書き、ホーソン批評の黄金時代の基礎をきずいたと言えるランダル・スチュアートは、ホーソンの作品における主要なテーマの一つはピューリタンの傾向とロマン的傾向の緊張、対立であると指摘し、ホーソンはピューリタンの側に傾いていると判断している。さらに、米国の偉大な作家の内でも「ピューリタンの中のピューリタン」とさえ呼ぶ²⁾。これに対して、ホーソン批評の黄金時代の中心的人物ハイアット・ワゴナーはホーソンがピューリタンであるとは認めず、「ホーソンは超絶主義者であった、という考えの方がいくらかは説得力を持つであろう」と言う³⁾。

ただし両批評家ともに認めているように、ホーソンの作品群においてはピューリタニズムとロマン主義双方に対する批判が見られ、また同時に彼は双方から何らかの影響を受けている。この複雑な関係はホーソンという人物自身の複雑さとつながるものであり、彼の作品の難解さにも結びつく。そこでこの論文の目的はホーソンの作品においてピューリタニズムとロマン主義がどのような扱いを受けているかを調べ、さらにはこの両者とホーソン自身の関係を探ることによってホーソンの内面にも迫ることである。

2. ピューリタン批判

まずはホーソンの作品群に描かれているピューリタン像をみよう。すぐに気がつくのが、ピューリタンたちが批判的に描かれている場合に用いられている形容詞がある決まったイメージを浮かびあがらせていることである。いわく“gloomy”（陰気な）、“intolerant”（不寛容な）、“bigoted”（独善的）などである。「メリー・マウントの五月柱」はピューリタンたちとメリー・マウントの陽気な人々との戦い、そしてピューリタン側の勝利を描いた短編である。この中でピューリタンは次のような描写がなされている。彼らは「厳しい信仰を持った人々」だが「まったく陰気でひどい奴ら」で、「ぞっとするような聖者たち」である。また、「ピューリタンの中のピューリタン」と呼ばれる指導者エンディコットも同様で、「顔も、体も、魂も、ぜんぶ鉄で作られて

いるかのようなのだ。」⁴⁾「金剛石の男」の主人公リチャード・ディグビーは「厳しい同胞たちの中でももっとも陰気で不寛容な男」とされている。その舞台設定は暗く無慈悲な宗教に支配されていた昔のころであり、ピューリタンの時代とは名指しされてはいないが、ホーソンの言葉はそれを明らかに示している。「優しい少年」においてはピューリタンによるクエーカー教徒の迫害が題材となっており、中でもピューリタンの子供たちがクエーカーの少年イルブラヒムを襲う場面の残酷さは強烈である。その時は「半ズボン姿の狂信者たち〔ピューリタンの子供たち〕に、父親たちの悪魔が乗り移った」のだった。

これまであげた例はいずれも短編であるが代表的長編『緋文字』もピューリタン時代が舞台であり、その中に出てくる人々もやはり同様に冷酷で独善的に描かれている。物語冒頭、まず出てくるのが「くすんだ色の服を着て灰色のとがった高帽子をかぶった」男たちである。彼らが集まっているのは監獄の前であり、その扉は「檜材のどっしりとした造りで、鉄の尖った大釘が一面に打ちつけてあった。」このイメージは「メリー・マウントの五月柱」におけるピューリタンのイメージと共通のものである。さらに、女主人公ヘスター・プリンが現れるまでに、「石のようにきびしく固いひげ面」、「初期の清教徒の厳しい性格」とくり返される。またこの社会においては女性たちもやはり同様な性格の持ち主だったことが処刑台の前に集まった主婦たちのヘスターに対する無慈悲な態度からわかる。そしてヘスターが登場する前に描かれる最後の人物である教区吏の姿がこれらの一連のイメージの一つのハイライトと言えよう。彼は「腰には刀、手には官杖をもち物凄くない気味な姿で現れた。この人物の顔付きには清教徒の法典のもつ陰気な酷しさが残らず表れ出ていて、罪人にこの法典を決定的に一番厳しく適用し執行するのが彼の役目だった。」この直後に輝くようなヘスターが金でふちどられた赤い「A」の文字をつけて出てくるのだからその対比効果はみごとなものがあり、また、ヘスターとピューリタン社会の対立というテーマ的な面でも意義

深く思われる。

ホーソンはこうしてピューリタンの独善性と冷酷さをしばしば批判の対象とした。ニューイングランドの初期ピューリタンは自らもイギリスにおいては宗教的圧迫を受けた経験があったのだが、新天地を求めてアメリカに渡ってからは、理想の宗教社会を作るため、「優しい少年」に描かれているように容赦なく他宗派を弾圧した。この事実にはホーソンが反感を示したのは容易に見てとれるところだが、ピューリタンに対するホーソンの反発に関してもう一つ考慮に入れておかねばならない重要かつ微妙な問題がある。ホーソンの先祖は初期ピューリタンの中でも有力なメンバーであり歴史に名を残していることは先にも述べたが、アメリカに最初に渡ってきたウィリアム・ホーソンはまさしくクエーカー教徒の弾圧の責任者の一人であり、またその息子ジョン・ホーソンは悪名高いセラムの魔女裁判の判事であった。本来ならば誇るべき名門の先祖を持ちながら、その先祖がホーソンにとっては許しがたいような行為に、しかも責任者として加担していたということは、ホーソン自身に、おそらくは罪の意識という形で、大きな影響を与え、それゆえ一種の罪ほろぼしのような気持ちも含めて独善的で無慈悲なピューリタンの姿を彼は描き続けたのではないだろうか。

3. ピュリタン賞賛

しかしホーソンはピューリタンたちを否定的に描いただけではなかった。アメリカがイギリスから政治的に独立したのは1776年の独立宣言によってであるが、それから何十年かはアメリカの文化は、文学も含めて、イギリス文化の亜流とされていた。小説に関して言えば本格的なアメリカ小説の歴史が始まるのは19世紀前半のことであり、ホーソンはチャールズ・ブロックデン・ブラウン、エドガー・アラン・ポー、ジェームズ・フェニモア・クーパーなどの創成者たちに続く世代に属していた。アメリカの知的独立宣言と呼ばれるエマソンの“The American Scholar”（「アメリカの学者」）が出たのは1837年のことである。エマソンの同時代人で

あったホーソンは自らの生きた時代とは無関係でありえなかったものであり、彼の愛国的、民主主義的精神もその一つの表れである。

この精神が彼をピューリタンに引きつける一つの要素となった。まず、もともとはイギリスにいたピューリタンたちは清教徒革命により王の圧政をくつがえすことに成功した。さらに、ニューイングランドのピューリタンたちもイギリス王の圧迫をはね返した。これはホーソンにとって賞賛すべきことであり、「エンディコットと赤い十字」や「白髪の戦士」はこれを題材にしている。エンディコットが赤い十字のイギリス国旗を破りすてたことをホーソンは「私たちの歴史の記録するもっとも大胆な勲」と称え、「永遠にエンディコットの名に栄あらんことを」と書いている。ただし、この英雄的に描かれているエンディコットが「メリー・マウントの五月柱」のエンディコットその人であるのだから、ピューリタンに対するホーソンの複雑な気持ちがうかがわれる。それはまた自分の先祖に対する彼の感情とも通じるものであろう。

4. 罪と悪の力

このような愛国的立場にもとづく好感とは別に、ホーソンにはピューリタンと深く相通じる点があった。彼の作品を理解する上で決定的に重要なその点とは、暗く強大な悪の力を認識していることである。ホーソンの時代にアメリカの指導的思想家とみなされていたのはコンコードでホーソンの隣人でもあった超絶主義者エマソンである。エマソンは人間の神性をとなえ、究極的な悪の力を認めない。彼はこう述べている。

わが国の青年たちは、原罪、悪の起源、予定説等の神学的な問題にとりつかれている。これらの問題は、いかなる者にとっても、けっして實際上の疑問となったことはないのだ。自らこの問題を求めてわき道に踏みこんだ者はいざ知らず、まっすぐに歩む者の人生行路が、こんな問題で暗黒になったことはない⁴⁾。

このように罪や悪の問題を重要視しなかった

エマソンに対して、ホーソンにとっては悪とは非常に現実的な力であり、人間は罪深き存在であった。彼の作品群では、ほとんどオブセッションと言えるほどに人間の罪と悪の問題が取り扱われている。彼が描いたサタン的人物たち、あるいは罪を犯したものは文字どおり枚挙にいとまがないほどである。長編を見ると『緋文字』ではヘスター・プリン、アーサー・ディムズデイル、ロジャー・チリングワース、『大理石の牧神』のドナテロとミリアム、などの主要人物たちがあげられるし、短編では「若いグッドマン・ブラウン」、「イーサン・ブランド」、「牧師の黒いヴェール」のフーバー牧師などがある。リストはまだまだ続くであろう。このような人物たちを描き続けたホーソンは、極めて初期の短編から最後の完成作『大理石の牧神』に至るまで一貫して人間の中に罪と悪を見続けたと言って良い。

ではピューリタンたちは罪と悪をどのように見ていたのか。まず、彼らにとって悪とは恐るべき現実の力であり、直接的には悪魔、サタンによって体現されていた。そしてニューイングランドでは荒野、あるいは森の中がサタンのすみかと考えられていた。サタンの手下に魔女たちがいるとされ、ホーソンの先祖が判事を勤めた1692年の魔女裁判で実際に多くの人々が魔女と認定され処刑されたことを思えば、ピューリタンたちがいかに本気でサタンの力を恐れていたか想像できよう。

ピューリタンの罪に関する考えはカルヴィニズムに基づくもので、原罪の教義もその一つである。ホーソンの短編集『旧牧師館の苔』に対する書評の中で彼の友人ハーマン・メルヴィルがホーソンの「暗黒」を指摘しカルヴィニズムと結びつけている有名な箇所がある。メルヴィルはこう述べている。

……しかしたしかにことは、この彼のうちにひそむ大なる暗黒の力のみならず、いかに深く考える精神といえどもなんらかの形のその影響力から必ずしも、また全く自由にはなりきれないかのカルヴィニ的な

生まれながらの墮落と原罪の意識にたよることである。

(中略) おそらくいかなる作家といえどもホーソンほどおそろしい力をもってこのおそろしい思想〔原罪〕を使ったものはいないであろう。さらに、この黒い思念は彼の全身いたるところに行きわたっている⁶⁾。

さて、カルヴィニズムに対抗してホーソンの時代に有力だったキリスト教思想がユニテリアニズムであった。リベラリズム(自由神学)の一派であったユニテリアン神学は罪と悪を重視せず、人間の善性を強調する。エマソンに代表される超絶主義、及びユニテリアニズムが当時のアメリカの支配的思想でありこれらと比較すると、ミリセント・ベルが述べているように、「ホーソンは真にピューリタンのな罪の意識を持ち、かつそれによって心を乱されていた——この点において彼は同時代の人々とはるかに隔たった所にいた。」⁶⁾

5. ホーソンとロマン主義者

ホーソン自身はロマン主義者をどうとらえていたのか。外面的なレベルでは接点がいくつかあり、ある程度の交流関係があったのは確かである。ホーソン自身は出席していなかったが、彼の家族はユニテリアンの教会に籍を置いていた。また妻のソフィアは多くの超絶主義者の友人を持っていた。実際、ホーソン夫妻は新婚時代に超絶主義の運動の一環であったブルック農場に参加したことさえある——ただしすぐに脱退したが。この農場への参加はその思想への賛同が理由ではなく新婚で生活が苦しかったため、経済的に少しでも楽になればと思ってなされたことであるという考えが今日では一般的である。それゆえ農場が財政的に困難だとわかるとすぐに見切りをつけたのであろう。

ホーソンのロマン主義に対する態度を知る上で重要な作品が「天国行き鉄道」である。これは風刺文学であり、ジョン・バニヤンの『天路歷程』の(当時としての)現代版である。この短編では、巡礼たちは徒歩ではなく鉄道に乗っ

て「滅亡の市」から「天国の市」に行こうとする。彼らの「途方もない大きな荷物は、昔の習慣のように自分の肩に背負って運ばれるのではなくて、すっかり荷物車にきちんと収められていた。また、「宗教のことは、心中ではいちばん気にかかっている事柄にはちがいがなかったが、風趣を慮って背景に押しやられていた。」巡礼たちの名前は、“Mr. Smooth-it-away”（物事を円滑に進める人），“Mr. Live-for-the-world”（世俗的な人），“Mr. Hide-sin-in-the-heart”（心に罪を隠している人）などであり、「虚栄の市」の聖職者たちには“the Rev. Mr. Stumble-at-truth”（真理につまづく），“the Rev. Dr. Wind-of-doctrine”（教義の空言）などがある。これらの名前は、人間が抱えている原罪や悪の力といった根本的な問題に、彼らは興味がないか、あったとしても無視し直面しようとしないうことを示している。罪と悪の問題に生涯こだわり続けたホーソンから見たユニテリアンの姿がこのような風刺の対象となったのだろう。

超絶主義者もまた風刺されている。かつては二人の残酷な巨人、「法王」と「異教徒」が住んでいた洞穴にはまた別の恐ろしい巨人「超絶主義者」が住むという。「その姿、容貌、実体、そして概略の性質などに関しては、自分自身でも、また彼にかわるほかのだれでもいまだかつてついに説明しえたことがないというのが、この巨大な悪漢のおもな特色なのである。」エマソンはコンコードではホーソンの隣人であり、個人的には必ずしも悪い関係にはなくお互いに行き来し話をしたこともあるのだが、二人の話はうまくかみ合わなかった。悪の問題をやはりとりあげ直視したメルヴィルとの有名な交友関係と比べるとその差は明らかであろう。

6. 「緋文字」におけるピューリタニズム対ロマン主義

ホーソンの代表作『緋文字』におけるピューリタニズムとロマン主義の対立を見てみよう。この小説におけるロマン主義的人物は何といてもヘスターである。罪を認めず、個人の自由・

尊厳を重くみる彼女に対して配されているのがアーサー・ディムズデル牧師でありピューリタン社会である。

ヘスターがアーサーと森で会う有名なシーンがある。そこで彼女は緋文字を投げ棄て、固苦しい帽子をぬぎ、自由を感じる。「何もかもやり直しなさい」とアーサーを勇気づけるヘスターの言葉はロマン主義的である。「将来はまだやって見ることや成功でいっぱいです。楽しい幸福もあります。善行も施せます。文明国の賢い名士にまじって学者にも賢人にもなってください。説教なさい！お書きなさい！お仕事をなさい！さあ立ち上がって出かけてください！」

この場面の舞台である森自体もロマン主義的に描かれている。「ぱっと日光がさしてきて、暗い森に光があふれ」「神秘的な森の奥深く」は「神秘的な喜び」となっていた。ロマン的な自然の懐に抱かれて二人の心理状態は高揚している。彼らの愛は「日光をつくりだして心に輝きをみだし外界へあふれ出」たのだ。その光は二人が自然の共感を得ていることを示していた。

このロマンティックな自然は、しかし、ピューリタンの側から見ると全く違う様相を帯びる。それは「人間の掟にも従わず、より高い真理にも輝かない未開異端の自然の森」であり、ピューリタンたちは森が実際にサタンのすみかだと信じていた。それゆえ森を後にしたアーサーが「一步毎に何か風変わりりで凶暴な悪いことをしたい思いにかられ」たのは注目すべきことである。彼は「森の中で悪魔と契約して、自分の血でサインした」のではないかと自ら疑い恐れる。そして作者ホーソン自身のコメントによると、「惨めな牧師よ！彼はそれに似た取引をしていたのだ！幸福の夢に誘われて、今まではそんなことをしなかったのに、知りながら地獄へ落ちる罪を犯したのだ。」つまり森の中でのヘスターのロマン主義的な誘いは悪魔の誘惑にも等しいということになる。

7. 「救い」の問題

今まで述べてきたように独善性と残酷さに反発を感じながらもホーソンはピューリタンの側に

立ち、ロマン主義に関しては正当性を認めていない。それでは彼はやはりピューリタンなのか。(ピューリタンに部分的には反発しつつも本質的にはピューリタンである、というのありうることである。)この問いに答えるにはもう一度罪の問題を考えてみる必要がある。本論においてはピューリタンとロマン主義者の根本的な相違点を罪の意識(特に原罪)の有無に求めたのだ。この点に関しては明らかにホーソンはピューリタンと同じ立場にある。しかしピューリタニズムとは何より宗教でありキリスト教の一派である。原罪の教義だけがキリスト教(そしてピューリタニズム)の本質であるわけではない。ここで細かい神学的論議を行うことは避けるが、人間が救われ神の国に入ることがキリスト教信仰の本質ではないのか。この観点からホーソンとピューリタニズムを比較してみたい。

ピューリタンが信じていた教義の一つに「予定説」がある。これは神の国に入るものは、あらかじめ定められている選ばれたものだけであるという考えで、他のものに救いはないとされている。そして言うまでもなくピューリタンたちは自らを「選ばれた民」と考えていた。アメリカに渡ってきた彼らは自らを旧約聖書のイスラエルの民になぞらえ、選ばれた民である自分たちが新天地であるアメリカ—約束の地カナンになぞらえられている—で理想社会を実現しようという意気込みで燃えていた。マサチューセッツ植民地初代総督ジョン・ウィンスロップの言葉、“…wee shall be as a citty vpon Hill”(我々は丘の上に建てられた町のようにならねばならない)⁷⁾にもそれが表れている。

しかしながらこの選民意識は裏を返せば独善にもつながる。自分たちの理想社会をおびやかすものにピューリタンたちは苛酷な弾圧を加えた。先に述べたクエーカー教徒の迫害もその例であって、ピューリタンたちは自分たちと異なる信条を持つものには全く無慈悲だった。また犯罪者などは神に選ばれた救われし者ではないことは明らかであるとされ、犯罪に対する刑罰は冷酷なものとなり罪人に対しても寛容は示されなかった。このようなピューリタンの態度をホーソンが

その作品で批判的に描き出していたことはすでに指摘したとおりである。冷酷・独善をきらうホーソンにとっては予定説はとうてい受け入れがたかったと思われる。

祖先の教義をそのまま認めることができなかったホーソンは、では、その作品において救いをどう描いているのか。彼が創り出した多くの罪人たちはどのようにその罪があがなわれているのか、あるいはいないのか。まず『緋文字』を見てみよう。ロジャー・チリングワース老人に関しては明らかであり、こう述べられている。「彼の行う悪魔の仕事が地上になくなったとき、この非人間的な男は…地獄という場所へ行くほかはなかったのだ。」

ではヘスター・プリンはどうか。アメリカに戻ってきてその善行の積み重ねにより世間の同情と畏怖と尊敬を受けるようになった彼女は、しかし、救われた者として描かれてはいない。あの世で愛するディムズデルと連れ添う可能性も臨終のディムズデル自身に否定され、また自らも「罪に汚れ恥辱で頭を垂れ終生の悲哀を担って」いると認めていた。そして何よりもラストシーンの墓石に彫られた紋章の言葉「暗い色の紋地に、赤い文字A」が与える暗いイメージがある。この赤い色は華やかな輝く赤ではなく「影よりも暗い」色である。罪を連想させる赤、さらに言えば、地獄の燃える炎の赤ではないだろうか。

一番問題となるのがディムズデル牧師の場合である。罪を隠しぬいてきた牧師が最後に処刑台の上で群衆に告白し息絶える場面は感動的である。自分の苦悩を述べ、「こういう苦悶の一つでも欠けていたら、私の魂は永久に救われなかったのだ」と語り、神の慈悲に感謝して死んでいくディムズデル—彼は救われていると考える批評家もいる⁸⁾。しかしこれは実にあいまいな問題であり、ホーソンははっきり述べてはいないというのが妥当な答と思われる⁹⁾。少なくとも三宅卓雄氏が言うように、「[人間のきずな]を越えた超自然的な至福への何らの確かな予感がそこにある訳ではない。」¹⁰⁾

以上ホーソンの代表作『緋文字』の三人の罪

人のケースを見てきたわけだが、長編ならば『ブライズデイル・ロマンス』のホリングワース、『大理石の牧神』のミリアムとドナテロ、さらに短編の若いグッドマン・ブラウン、フーパー牧師、イーサン・ブランドなど罪を犯したものは、たとえ罪を悔い改めていてもはっきりした救いが描かれることはないのである。さらにまた注目すべきことは、ホーソンの作品には聖書に関する言及が非常に多いにもかかわらずキリストについて述べている箇所がほとんど見当たらないことである。罪の救済に関してキリストによる贖罪は非常に重要な意義を持つのだが、彼はそういう考えを述べていない。ピュリタンと同様にホーソンは罪や悪の力を強く感じながらも、ピュリタンは救われているという信仰を持っていたのに対し、彼はそのようなはっきりした信仰が持てなかったのではないだろうか。

8. 結び

ホーソンの作品は暗く重い印象を与えるものが多い。罪と悪を描いて救いがなければ当然のことと言えよう。しかしまれには文字どおり「光がさす」ことがある。「ぼくの縁者、モリヌー少佐」の中でロビンが教会の中をのぞき込む場面がある。「そこには、月光がふるえるように差しこみ、人のいない座席にふりそそいで、静かな側廊にのびていた。いっそうかすかではあるが、いっそう荘厳な光が、説教壇のまわりにたゆたい、一条の孤独な光線が、大胆にも開いたままの大きな聖書の上にとどまっている。」これとは逆に光が聖書に届かない場合はどうなるのか。「金剛石の男」、リチャード・ディグビーは洞穴に引きこもって「聖書を読み間違えていた。夕日の光線が彼のまわりの深く陰気な影を突き抜けて来ず、聖なるページにも届かなかったからだ。」これらの例から「光」がホーソンにとって、聖書に象徴されるキリスト教信仰と深く関わっているのがわかる。

さらに、同じく「金剛石の男」の中でリチャードを愛するメアリ・ゴフの霊が彼を破滅から救おうと現れる。この時聖書に「かすかな光が投

げかけ」られる。メアリが「純粋な宗教を象徴していた」と述べられているのは意義深いことである。ここでは「信仰」と「光」に、さらに「愛」という要素が加わっている。『七破風の家』において作者自身のコメントと考えられる次の一節がある。「どの家の窓にも暖かい日の光が差し込むように、困った状態におちいっているどんな人に対しても神が愛の光 (lovebeam) をおくり、気にかけて憐れんでくださるのだ。」

長編四作の中で、他と比べて比較的明るい雰囲気がある『七破風の家』がホーソンの好みだったと言う。彼自身は明るさ、光、愛、こういうものが好きだったに違いない。ところがホーソンの作品を総体的に見るとやはり暗いものの方が圧倒的に目につく。光と愛に結びついたキリスト教信仰にあこがれながらも、実際に強く感じてしまうのは暗い罪や悪の力の方であった——このようなホーソン像が浮かんでこないだろうか。先ほど述べたように彼にはピュリタンのような救いの確信はなく、かといってロマン主義者のような楽天的な人間観も持てなかった。そんな彼がつかの間感じることでできた救いが上のような箇所に表れているとも考えられる。しかし結局はホーソンにとっての現実とは罪と悪に満ちたものだった。これは彼にとって悲劇でもあるのだが、また、その現実を執拗に、誠実に追求し掘り下げていったゆえにこそ人間存在の本質をえぐる作品が書けたのであり、その作品が現代に通じるものともなっているのだ。

引用訳について

- ・『緋文字』（鈴木重吉訳）新潮文庫
- ・「ぼくの縁者、モリヌー少佐」、「エンディコットと赤い十字」、「天国行き鉄道」（大橋健三郎訳）集英社世界文学全集第17巻『緋文字／美の芸術家』所収
- ・「優しい少年」、「メリー・マウントの五月柱」（井坂、佐久間、田中、山岸訳）桐原書店『トワイヌ・トールド・テールズ』所収

以上を用いたが、筆者の判断で変更した箇所もある。上記以外の作品は筆者訳。なお他の参考文献からの引用に関しては注に示してある。訳者名がない場合は筆者訳。

注

- 1) ロマン主義の定義はむずかしい問題だが、本論においては広義には一般的に言われる、個人を強調し、自由を求め、はるかなものにあこがれ、自然を賛美し、感情を重視し、人間に無限の可能性を見る、このような思想を指し、狭義には T. E. ヒュームが唱えランダル・スチュアートが用いたところの「原罪の教義を拒否する人たち」とする。基本的には後者は前者の特徴を具えている。（「基本的に」というのは、初期ユニテリアニズムをロマン的と呼ぶことには問題があるからである。しかしホーソンが創作活動を始めた1830年代以降のユニテリアニズムはロマン的としてよいだろう。）
- 2) ランダル・スチュアート『アメリカ文学とキリスト教』（刈田元司訳）北星堂書店 P. 17, P. 107
- 3) Hyatt H. Waggoner, *Hawthorne: A Critical Study* (Cambridge, Mass., 1955; rev. 1963) pp.13-15
- 4) Ralph Waldo Emerson, "Spiritual Law"
齊藤光訳
- 5) Herman Melville, "Hawthorne and his Mosses" (1850) 刈田元司訳
- 6) Millicent Bell, *Hawthorne's View of the Artist* (New York, 1962) p. 16
- 7) John Winthrop, "A Modell of Christian Charity" 柳生望訳
- 8) スチュアート, 前掲書 p.113 ; 柳生望『アメリカ文学に見るピューリタニズムの遺産』ヨルダン社 pp.84-85
- 9) Waggoner, p154; 清水汎『作家と信仰』KGK新書 p.50 参照
- 10) 三宅卓雄『どう読むかアメリカ文学』あぼろん社 p.185